

「宗教と社会」学会 第14回学術大会

2006年6月3日(土)・4日(日)

同志社大学(今出川キャンパス)

会場： 同志社大学(今出川キャンパス) 至誠館

受付	1階ロビー
本部・クローク	S3教室
休憩・書籍販売	2階ロビー
昼食会場(4日)	S32教室

日程： 6月3日(土)

12:00～	受付
11:00～	常任委員会(3階会議室)
13:00～17:30	個人発表
17:40～18:20	総会(S22教室)
18:40～20:20	懇親会(新島会館)

6月4日(日)

9:00～	受付
9:30～12:00	テーマ・セッション
12:00～12:40	昼食(S32教室)
12:45～13:20	ゴスペル音楽(神学館3階チャペル)
12:00～13:00	常任委員会(3階会議室)
12:00～13:00	編集委員会(S30教室)
13:30～17:00	テーマ・セッション

発表題目と発題者 個人発表 (6月3日)

	A会場 (S21)	B会場 (S23)
13:00～ 13:50	山口正博(國學院大學大学院) 修験道における政治と宗教—近世の 英彦山派成立前後をめぐって— 8p.📄	舟木徹男(京都大学人間・環境学研究 科博士課程) アジールの内面化との関連からみた 「魔女狩り」 13p.📄
13:55～ 14:45	藤本龍児(京都大学大学院 人間・環 境学研究科 共生文明学専攻) アメリカにおける保守主義と宗教右 派—公共哲学的観点からの考察— 9p.📄	尾上正人(奈良大学) 予定された「意図せざる結果」? —「ヴェーバー・テーゼ」に関する 一つの思考実験— 14p.📄
14:50～ 15:40	辻隆太郎(北海道大学大学院 文学研究科 思想文化学専攻 宗教学・インド哲学講座博士 後期課程) キリスト教ファンダメンタリズムと 陰謀論 10p.📄	岡本 亮輔(筑波大学大学院 人文社会科 学研究科 哲学・思想専攻 宗教学・比較思想 学分野) ブリコラージュ再考—宗教の戦争論 的分析についての試論 15p.📄
15:45～ 16:35	高尾賢一郎(同志社大学大学院 神学研究 科 博士後期課程 歴史神学専攻 一神教学際 研究コース) アフマド・クフターローのスーフィー の側面 11p.📄	安藤泰至(鳥取大学) 「スピリチュアリティ」を語る文脈 16p.📄
16:40～ 17:30	辻村優英(京都大学人間・環境学研究 科 博士後期課程) チベット亡命政府の民主主義理念に おける宗教的背景 12p.📄	真鍋一史(関西学院大学) 欧米社会学における宗教研究と宗教 調査 17p.📄

	C会場 (S33 教室)	D会場 (S34 教室)
13:00～ 13:50	<p>李和珍(国学院大学大学院)</p> <p>グローバル化時代の到来と新宗教の展開 —妙智会教団の事例—</p> <p style="text-align: right;">18p.👉</p>	<p>楊紅(名古屋大学大学院)</p> <p>満州族シャーマニズム儀礼の変容 —瓜爾佳(グワルギヤ)氏族の「家祭(ジヤジ)」の事例研究より—</p> <p style="text-align: right;">22p.👉</p>
13:55～ 14:45	<p>水元明法(北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科 博士後期課程)</p> <p>仏教寺院のナレッジ・マネジメント</p> <p style="text-align: right;">19p.👉</p>	<p>白波瀬達也(関西学院大学大学院 社会学研究科 博士課程後期課程2年)</p> <p>韓国の福音派プロテスタントによるホームレス伝道</p> <p style="text-align: right;">23p.👉</p>
14:50～ 15:40	<p>ランジャンナ・ムコパディヤーヤ (名古屋市立大学大学院 人間文化研究科)</p> <p>日本における宗教ボランティアの可能性—仏教の国際協力活動及び仏教系 NGO・NPO について—</p> <p style="text-align: right;">20p.👉</p>	<p>李雯文(京都大学人間・環境学研究科博士課程)</p> <p>カトリックであることとは —中国陝西省のカトリック村における日常的宗教実践と宗教意識—</p> <p style="text-align: right;">24p.👉</p>
15:45～ 16:35	<p>大谷栄一(南山宗教文化研究所)</p> <p>戦前期日本における仏教運動のポリティクス—1930年代の新興仏教青年同盟の事例—</p> <p style="text-align: right;">21p.👉</p>	<p>古澤健太郎(同志社大学神学研究科 博士後期課程 歴史神学専攻)</p> <p>沖縄バプテスト連盟と土着信仰の関係に見るキリスト教受容</p> <p style="text-align: right;">25p.👉</p>
16:40～ 17:30		<p>藤井健志(東京学芸大学)</p> <p>戦後台湾における日本宗教の展開</p> <p style="text-align: right;">26p.👉</p>

発表題目と発題者 テーマセッション（6月4日）

	S22 教室	S33 教室	S34 教室	S23
9:30-12:00	一神教としてのユダヤ教・キリスト教・イスラーム—「原理主義」から見た相互認識— ＜一般公開、入場無料＞ 27p.	「カルト」問題研究の展開と課題 33p.	地域社会における伝統的宗教習俗と新旧宗教—宮城県仙台市泉区およびその周辺の多角的フィールド調査から— (1) 31p.	/
13:30-17:00	『原理主義』の実相—中東・アメリカ・EU— ＜一般公開、入場無料＞ 29p.	「ジェンダーで学ぶ宗教学」の可能性 34p.	地域社会における伝統的宗教習俗と新旧宗教—宮城県仙台市泉区およびその周辺の多角的フィールド調査から— (2) 31p.	

1 一神教としてのユダヤ教・キリスト教・イスラーム—「原理主義」から見た相互認識—

＜同志社大学 COE プログラム共催テーマセッション＞（一般公開・入場無料）

[9:30~12:00 S22 教室]

司会者	森 孝一（同志社大学）
発表者	手島勲矢（同志社大学） 小原克博（同志社大学） 中田 考（同志社大学）
コメンテーター	芦名定道（京都大学）

2 「原理主義」の実相—中東・アメリカ・EU—

＜同志社大学 COE プログラム共催テーマセッション＞（一般公開・入場無料）

[13:30~17:00 S22 教室]

司会者	小原克博（同志社大学）
発表者	臼杵 陽（日本女子大学） 森 孝一（同志社大学） 内藤正典（一橋大学）

コメンテーター 手島勲矢（同志社大学）
中田 考（同志社大学）

3 地域社会における伝統的宗教習俗と新旧宗教—宮城県仙台市泉区およびその 周辺の多角的フィールド調査から—

[9:30～12:00、13:30～17:00 34 教室]

司会者 川又俊則（鈴鹿国際短期大学短期大学部）
発表者 平山眞（神奈川県立衛生看護専門学校非常勤講師）
小島伸之（國學院大學栃木短期大学非常勤講師）
寺田喜朗（東洋大学大学院）
大西克明（東洋大学大学院）
高橋嘉代（東北大学文学部阿部次郎記念館）
瀧澤昭憲（東洋大学大学院修士課程修了）
コメンテーター 孝本貢（明治大学）
鈴木岩弓（東北大学）
土居浩（ものづくり大学）

4 「カルト」問題研究の展開と課題

[9:30～12:00 S33 教室]

司会者 櫻井義秀（北海道大学）
発表者 中西尋子（龍谷大学）
渡辺太（大阪大学）
弓山達也（大正大学）
コメンテーター 藤田庄市（フォト・ジャーナリスト）

5 「ジェンダーで学ぶ宗教学」の可能性

[13:30~17:00 S33 教室]

司会者	川橋範子 (名古屋工業大学)
発表者	川橋範子 (名古屋工業大学)
	黒木雅子 (京都学園大学)
	田中雅一 (京都大学)
	堀江有里 (花園大学)
	源淳子 (関西大学)
コメンテーター	小松加代子(湘南国際女子短期大学)
	三土修平 (東京理科大学)

6 災害と救い

[13:30~17:00 S23 教室]

司会者・コメンテーター	三木 英 (大阪国際大学)
発表者	今井信雄 (関西学院大学)
	井上利丸 (NHK 大阪)
	杉本良男 (国立民族学博物館)
	大岡頼光 (中京大学)
	金子 毅

修験道における政治と宗教—近世の英彦山派成立前後をめぐって—

山口正博 (國學院大學大学院)

宗教研究において、山伏は一般的には民間宗教者や民俗宗教の担い手といった民衆に近い存在として捉えられている。確かに、山伏の宗教的実践は民衆の生活と密接な関係を持つ側面もあったのであるから、そうした視点は妥当なものである。しかし、近世においては山伏を統括する有力霊山や修験道教派の本山は幕府や藩の宗教政策と独立に存在することは不可能であり、それらの影響を蒙っていた。そもそも教派自体が幕府の公認によるものであり、各藩内の山伏がいずれの教派であるかも藩の政策に左右されたようである。

近世以前の修験道としては武力を有する地方の修験霊山や聖護院を中心として各地の熊野先達を組織した天台系修験の教団(本山派)が存在していた。なお、真言系の修験には当山三十六正大先達衆が存在したものの、本山派と比肩しうる組織ではなかった。ところが、慶長18年(1613)に幕府が修験道法度を発して聖護院を本山とする本山派と三宝院を本山とする当山派が幕府公認の修験道教派として確立したことで、例外はあるが、全国の山伏は本・当いずれかの派に属することと定められた。

この法令の影響が即座に全国に波及したわけではないが、各藩の宗教政策にも当然影響が及んでくる。福岡藩では明暦3年(1657)に当山派の明厳院を藩の修験道総触頭とした。これは各地で起こった本山派と当山派の争い同様、藩内の修験道にも影響を及ぼした。当山派は幕府に公認されることで新たに確立された教派であり、筑前国宝満山(天台系修験)の財行坊・山仲坊はこれに不満を持ち、英彦山に働きかけてその末山であるという証文を受ける。これは英彦山にとっても宝満山が末山であるという認識を生じさせる結果となる。一方、宝満山法頭平石坊は英彦山の末山となることに不満を持ち、数度の上洛の後、延宝4年(1676)には遂に聖護院門主に拝謁を果たした。宝満山では英彦山を本山と仰ぐ者と聖護院に接近しようとする者に山内が割れていたのである。

こうした宝満山の動向と平行して英彦山と聖護院にも葛藤が生じていたが、貞享2年(1685)には、宝満山法頭平石坊が聖護院門主の招請に応じ大峰山入峰に供奉した。英彦山は福岡藩寺社奉行に英彦山と宝満山は聖護院とは別派であると訴える。こうして、英彦山と宝満山の本末論争は公の訴訟となる。これに対して、福岡藩は英彦山も宝満山も聖護院の末山であるとの見解を示し、財行坊・山仲坊を追放処分にした。結局、この論争では本末は決しないまま元禄2年(1692)に一応の和解が成立した。

この過程で福岡藩は平石坊も追放し、新たに座主楞伽院を建て先代藩主の側近の親類を任命した。元禄6年(1693)には楞伽院兼雅は聖護院門主の招請を受けて、その入峰に供奉した。英彦山はこれを不満とし再び宝満山との本末論争となったが決着がつかなかった。

こうしたこともあって、英彦山は幕府寺社奉行に訴え、聖護院との本末論争が展開される。元禄8年(1695)11月9日、寺社奉行は本山派の伽耶院前大僧正と坊官中務卿法印光有を江戸に招致し、詮議に入った。英彦山座主相有は英彦山の話来歴とその証拠文書等を準備し、幕府寺社奉行に提出している。そして、元禄9年(1696)3月2日、寺社三奉行列席のもと判決が下され、英彦山の勝訴が決定した。こうして英彦山は天台修験別本山の地位を確立し、聖護院とは別派であることが公認されたのである。

英彦山派の成立後、宝満山は本山派に属することとなった。宝満山座主は先代藩主側近の親類であり、福岡藩領内にあったかつての英彦山の末山を宝満山末として組み込むようになる。筑前国早良郡姪浜の鷲尾山は度々宝満山末になるよう勧められるが固持し続ける。しかし、ついには山伏としての活動に関する認可を福岡藩から得られずに廃絶してしまった。

本発表では英彦山と宝満山・聖護院との間での本末論争と英彦山派成立後の福岡藩内の英彦山の末山に対する藩の政策について、史料をあげて詳しく検討していく。

アメリカにおける保守主義と宗教右派

—公共哲学的観点からの考察—

藤本龍児 (京都大学大学院 人間・環境学研究所 共生文明学専攻)

アメリカの現在の政権は、いわゆる「ネオコン」と呼ばれる思想集団によって動かされている、と言われる。そして、そのネオコンと手を携えて、大きな影響力を発揮しているのが「宗教右派」と呼ばれる勢力である。それらによって主導されている現政権の政策は、必ずしも成功しているとはいいがたい。たとえば、イラク戦争において、欧米がそれにたいする協力を拒否したことや、あるいはイラクにおける戦後処理が混迷の様相を深めていることなどをみても、そのことがわかるであろう。むしろ、政策のみならず思想そのものに対する批判的言説も多く展開されている。

しかし、両者は、いまでもアメリカにおいて一定の影響力を保持し続けている。また、日本においても、政策面では小泉政権がブッシュ政権に追随し、思想面では「保守派」と呼ばれる人々がネオコンに追従している。それらに対する批判が少なくないにもかかわらず、依然としてこうした政策や思想の影響力が失墜しないのは、それらがアメリカ国民や日本国民に、非常にわかりやすい世界観を提示しているからである、といえるかもしれない。しかし、アメリカにおけるネオコンと宗教右派の関係については、なおも考察されなければならないことが残されていると考えられる。まして日本にあっては、アメリカの保守主義や宗教思想にたいする理解は、依然として不十分であると言わざるを得ないであろう。

もとよりネオコンとは、「ネオ・コンサヴァティヴ (Neo-Conservatism)」のことであり、したがって、それが保守主義の一形態であるということは広く知られている。しかし、それが、どのような形で保守主義の思想的系譜に位置しているのか、もしくはその中でいかなる特質を持っているか、ということになると、不分明な点が多いだろう。ネオコンだけでなくアメリカにおける保守主義は、ひどく幅の広い概念であり、ことによると全く矛盾する思想を表すことさえある。そして実際に、ネオコンはもちろん、アメリカの保守主義は、その思想史的系譜のなかでは、かなり特異なものであると言えるのである。

したがって、ネオコンの特質を理解するには、アメリカの保守主義の思想的系譜に位置づけ、さらにはヨーロッパのそれとも比較する作業が重要になるに違いない。

そして、アメリカにおいて、ある種の保守主義が勢力をのびし始めたのは 1980 年代であるが、それは同じく宗教右派が政治的領域で注目されてきた時期でもあった。とすれば、宗教右派を理解するうえでも、それをアメリカにおける保守主義との関係から考察することは、重要であるに違いない。またそれは、アメリカと切り離すことのできない繋がりをもつ日本において、アメリカの宗教事情を理解するのに役立つとも考えられる。

これまでのところ、アメリカの保守主義、とりわけ「ネオコン」と宗教右派の関係については、すでに森孝一氏が次のような一致点と相違点を指摘されている。一致点は、①両者が、正義と悪、光と闇、というような非常に単純な二元的な世界観をもっていること。②イスラエルを絶対的に支持すること。③アメリカが持っている使命感にたいして共通の認識を持っていること、この三つである。相違点は、①ネオコンが全く世俗的であるということ。②宗教右派の関心の対象が、主として国内問題にあるのに対して、ネオコンのそれは国際問題にあるということ、この二つである。

こうした整理をふまえて本発表では、とくにこの両者の世界観に注目して、それに社会哲学的考察を加えてみたい。また、そうした検討を通じて、その両者についての理解を深めることを目的とする。

キリスト教ファンダメンタリズムと陰謀論

辻 隆太郎

(北海道大学大学院文学研究科思想文化学専攻宗教学・インド哲学講座博士後期課程)

陰謀論” Conspiracy Theory”とは簡単に言えば、悪意ある強力な人々が一貫した意志と計画の下この世界を操っている、とする主張である。陰謀論という言葉は基本的に否定的レッテルであり、不合理で矛盾に満ち真剣に検討するに値しない逸脱的理論であるということを含意する。そのような荒唐無稽な理論としての陰謀論は、しかしながら、様々なヴァリエーションを生み出しながら様々な人々によって受容されている。陰謀論は人々の歴史解釈、社会解釈のひとつの形態であり、また現代社会に対する（主に否定的な）価値判断である。それはあくまで非主流の主張ではあるが、確固とした文化的領域を形作っており、近年ダニエル・パイプス” *Conspiracy: how the paranoid style flourishes and where it comes from*”、ジョージ・E・マーカス編” *PARANOIA WITHIN REASON*”、ティモシー・メリー” *Empire of Conspiracy: The Culture of Paranoia in Postwar America*”など、数多くの研究書が出版されている。

陰謀論はしばしば宗教思想に結びついて登場する。宗教と陰謀論の親和性は不可避的なものでは全く無いが、にもかかわらず両者の関係は密接なものである。中でもキリスト教と陰謀論の関係は、その他の宗教思想と比較してより密接であるように思われる。その原因はキリスト教思想に内在的なものというよりは陰謀論の「思想史」に求められるだろうが、陰謀論の思想や語彙へのキリスト教の影響は甚大である。現代の陰謀論の直接的な起源であり今なお重要な論拠となっているフランス革命期のフリーメーソン陰謀論や偽書『シオンの賢者の議定書』は、特権的支配階級の論理とキリスト教信仰の正当性を結びつけ、「無神論的」啓蒙思想と革命による「衆愚政治」を反キリストの陰謀として弾劾するものであった。現代の陰謀論の主流はフリーメーソン/ユダヤ陰謀論を中心とした「新世界秩序 New World Order」陰謀論であるが、それらの「陰謀」と「反キリスト」はしばしば同一視される。さらに重要なことは、陰謀論が差別や暴力と結びつく危険性である。陰謀論は排他的なナショナリズムや人種差別主義、あるいは他者への不寛容など正当化の論理として採用されている。それは信念に基づいた「善と悪の戦い」として他者への攻撃を正当化し、宗教思想と暴力との間を仲介するのである。

本発表で考察対象とするのは福音派牧師である小石泉の一連の著作である。彼の主張は概略以下のようなものである。悪魔崇拝者たる「ユダヤ人」や彼らの支配下にある「リベラリスト」が全世界を奴隷とする一元的支配のためにグローバル化を推し進め「世界政府」を実現しようとしている。ホモ、フェミニズム、人工中絶の容認、進化論、ニューエイジ、教育や家庭の崩壊、少年犯罪の凶悪化、ホロコーストや南京大虐殺という「虚構」、戦後民主主義、…などは全て、正しいキリスト教道徳を破壊し、正しい日本民族精神を破壊し、人々を墮落させ支配するための反キリストの陰謀である。世界は陰謀にほぼ完全に支配されているが、キリスト再臨は間近であり、ヨハネの黙示録の予言通り反キリストとされに従う世界は終末を迎える。陰謀に対抗し終末に救われるためには正しいキリスト教信仰に帰依するしかない。こうした小石の主張は大部分、他の陰謀論者の主張にも共通して見出されるものであり、現代の陰謀論のひとつの典型例である。本発表では小石の陰謀論が彼のキリスト教信仰によって正当性を与えられていること、小石における陰謀論とキリスト教信仰の相互関係を指摘する。そしてキリスト教ファンダメンタリズムの論理が陰謀論の論理と一定の親和性を持ち、陰謀論の提供する「普遍の真理を破壊しよう」と目論む強力な悪意ある単一の敵」という明快な世界観がファンダメンタリストの自己認識および現代社会に対する認識にとって如何に魅力的であるかを考察する。

アフマド・クフターローのスーフィーの側面

高尾 賢一郎

(同志社大学大学院神学研究科・博士後期課程・歴史神学専攻・一神教学際研究コース)

本発表は、現代のシリア・アラブ共和国で国家法最高諮問官（グランド・ムフティー）を 40 年間務めたことで知られるアフマド・クフターロー（1912-2004）の、ナクシュバンディー・スーフィー教団の導師（シャイフ）としての側面に焦点を当て、彼が世俗政権のシリアの下でどのように同教団を対応させていったかを明らかにすることを目的とする。

クフターローはクルド家系の人物で、祖父の代からダマスカスのアブー・ヌール・モスクの導師を務めていた。この側面と、上述の国家公務員としての側面が、彼について語られる際の代表的な捉え方と言える。そしてこれらの国内的な立場に加え、広くローマ・カトリックや日本の大本教団とも関わった「宗教間対話」における彼の活動は、世界を股にかける国際的宗教者としてのイメージを彼に与えた。しかし彼のこの多様な側面は、日和見主義者や、老獪で狡猾な政治家といったイメージをも彼に与えてきた。世俗化政策を基本路線とするバアス党政権下で国家公務員として従事しながら、それと反対の立場に立つムスリム同胞団の設立に関わったことなどを挙げ、彼を鶴的な人物として捉える見方は根強い。

同時に彼はスーフィー教団（ナクシュバンディー教団）の導師の家系に生まれ、その地位を受け継いでおり、その役割は宿命的でもあり、重要であったことは間違いない。但し修行道場という性質上、ナクシュバンディー教団自体がシリア社会や政府と公式な関係を持つこともなく、上述のものとは比べて彼のこの側面が注目されることは多くないように、一般に思える。しかしそれは、スーフィー教団を公的、制度的に認知し、政府の管理下に置くエジプトとは異なり、バアス党指導下の全体主義国家でありながら、スーフィー教団を公認、管理しないシリアの国家事情、更にワッハーブ運動とサラフィー主義によるスーフィズムに対する非難を考慮し、無用な誤解を避けるために彼自身がスーフィー的側面を表に出さなかったためだと考えるのが妥当であろう。これに関しては、現代イスラーム世界全域で、一部のスーフィー教団がそのことを自覚し、教団の制度や組織に手を加えることによって「非イスラーム的である」との非難を免れようとした一連の流れは、「ネオ・スーフィズム」や「サラフィー・スーフィー」といった用語によっても紹介されている。

しかし、彼の事例をこれらの外的要因によって理解し、「世渡り上手な人物」と彼を見る既存の認識には問題があるように思われる。本発表の目的はその問題点を明らかにし、新しい見方を提示することにある。そのためにはまず、彼のスーフィズムそのものに対する理念を明らかにする必要があるが、それは父アミン・クフターローがイスラームの復興、統一運動を試行してきたことに遡って理解しなければならない。アミン・クフターローはアブー・ヌール・モスクの導師として、20 世紀前半のシリアのイスラームにおける党派主義の除去に努めた人物であり、特に四大法学派の統合、またスーフィズム（霊学）とシャリーア（科学）の統合を目指した。アフマド・クフターローは、それを更にイスラームの宗派統合、ひいては多宗教間対話にまで拡大させた。ナクシュバンディー教団に関して、アミン・クフターローが求め、アフマド・クフターローが継承したその理念の展開を、サラフィーやワッハーブ主義者に対する護教的対応にのみ還元することはできない。

同氏の研究は、彼が目指したイスラームの姿を捉えることに最終的な価値があると、発表者は考える。今回の発表はその第一歩として、比較的多数の先行研究が存在するスーフィー教団の資料から、彼の導師としての側面を明らかにする。それは様々な毀誉褒貶を集めた同氏の一側面に過ぎないが、そのグランド・デザインを埋める、大きな陶片と言えよう。

チベット亡命政府の民主主義理念における宗教的背景

辻村優英 (京都大学人間・環境学研究所) 博士後期課程

本発表の目的は、チベット亡命政府の民主主義理念における宗教的背景を探ることによって、亡命政府の理想とする民主主義のあり方とは逆の帰結が論理的に導かれてしまうことを示すことにある。そしてその原因は、菩薩の化身をダライ・ラマという、生きている個人に見出すというチベット仏教の独自性にあると考えられる。考察の際、主に参照するのは、亡命チベット政府内閣首席大臣サムドン・リンポチェの発言である。彼はダライ・ラマの抽象的な理念をより具体的に整理し提示する役割を果たしており、亡命政府の民主主義理念について多く発言している。彼は民主主義の制度はチベット人にとって新しいものではないと述べている。彼の見解によると、亡命政府の民主主義の理念はチベットの伝統的な思想の中にあつた。それは、まさにチベット仏教であり、その思想の中にチベット仏教的な独自の見解に基づく民主主義の土台が見出せるというのである。だが、本発表ではチベット仏教という宗教的土台の只中において、亡命政府の民主主義理念における解決しがたい問題が潜んでいることを指摘したい。それは、仏教における自律的な意思決定の姿勢とチベット仏教独特なダライ・ラマ制度との間に潜む問題である。ダライ・ラマの著作には、「金を、焦がし、切り、擦って、それが金であるかどうかを吟味するようにして、僧侶や学者たちは、私の言葉を受け入れるようにしなければならない。決して私を尊敬するがゆえにではなく、私の言葉をよく吟味しなければならない」という文章が度々引用される。この文章の内容の意味するような批判的で自律的な意思決定のプロセスが仏教を基礎とする民主主義の理念の根幹であり、このような姿勢でチベット人たちが政治を営んでいくことをダライ・ラマや亡命政府は望んでいる。「人々がダライ・ラマに頼ることなく民主のプロセスを通して自身の力で活動できることが重要である」というダライ・ラマの1990年の演説はそのことを如実に表しており、チベット人がダライ・ラマに依存しないことが理想であることを示しているだろう。

しかしながら、亡命政府の民主主義の理念を宗教的背景から考察していくと、ダライ・ラマに依存しないという理想とは裏腹に、ダライ・ラマに依存せざるをえないという構図が浮かび上がってくるのである。この考察において焦点が当てられるのは、平等の理念である。サムドン・リンポチェに従えば平等なものとして扱われる対象は有情である。では有情はどのようにして平等なものとして規定されるのか。それは、菩薩と有情という二項関係から導くことができる。有情が苦しみを背負ったものであると知り、彼らを救おうとする立場にあるものが菩薩である。つまり、菩薩という超越的な視点から眺めることによって有情は平等であると規定されうる。

このような二項関係は、ダライ・ラマとチベット人との間における宗教的背景の中に見出すことができる。ダライ・ラマは周知の通り観世音菩薩の化身とされている。観世音菩薩はチベット人の生みの親であり、チベットにおいて有情を助けようとした際に千手観音となったとされている。ここから、観世音菩薩の化身としてのダライ・ラマは、苦しみを背負った有情を導くという構図が浮かび上がる。つまり、ダライ・ラマという超越的な立場の存在によって、有情は平等であるとされ、ダライ・ラマによって導かれることになるのである。このようなダライ・ラマの必要性は、サムドン・リンポチェが理想的な民主主義が必要とする3要素の一つを賢明な指導者とし、その具現化されたものが現ダライ・ラマ14世であると述べていることから明らかである。

アジールの内面化との関連からみた「魔女狩り」

舟木徹男（京都大学人間・環境学研究所博士課程）

本発表の出発点にあるのは、西洋と日本において、中世から近代にかけてのアジールの変容過程が、精神医療およびその対象である人間の「内面」の成立といかなる関係を持っているのか、というテーマである。

E. エランベルジェや中井久夫が指摘するように、フロイトを代表とする力動精神医学は、ロマン主義の思想的系譜に属している。フロイトにおける幼児期空想や夢の重視も、ロマン主義一般に見られる個人の「内面」の重視の一形態として理解できる。

「内面」に重きを置くロマン主義は、直接的にはフランス革命の理想への挫折を契機として、理性によって世界と人間を一元的に理解しようとする啓蒙主義へのアンチテーゼとして生じてきた。その意味で、ロマン主義的な「内面」とは、啓蒙主義による世俗化過程のなかで、個人の内部に求められた不可侵の避難所、すなわち「アジール」であるという見方がさしあたり可能になる。

本発表では、この「近代人のアジールとしての内面」という考え方を念頭に置きつつ、その起源を、啓蒙主義に先立つ時代の現象、すなわち「魔女狩り」との関連へと遡って考察したい。魔女狩りは中世末に激化し始め、啓蒙主義時代に終息した。言い替えれば、近代の始まりとされるルネサンスおよび宗教改革と、始期・終期をおなじくする。また、魔女狩りは、その犠牲者に多くの精神病患者が含まれていたという事実だけでなく、魔女の審問それ自体が個人の内面的心理に焦点を当てていたこと、魔女狩りに果敢に反対したワイヤーが精神医学の父とされること、さらには、それまでの時代においては魔女自身が医療者としての側面を持っていたこと等々からみても、精神医療との関連の深い現象であることが理解される。

本発表においてはまず、これらの既知の関連を念頭に置きつつ、魔女狩りがキリスト教的世界観による世界の一元化によって現実の時空におけるアジールが消滅させられてゆく過程で激化した現象であり、また、アジールはこの過程に伴って個人の「内面」へと封じ込められてゆく、その後の啓蒙主義・ロマン主義において、近代精神医学が対象とする「内面」が完成した、という大枠の見解を提出したい。（なお、発表者は、ヨーロッパのキリスト教化ということについて、カトリックとプロテスタントのあいだの断絶—すなわち、後者による前者の呪術性の否定—を認めつつも、他面から見れば、両者は、キリスト教の世界観が異教世界の呪術性を段階的に抑圧してゆく一続きの過程と見ることができる、という立場を取る。）

次に、上記の認識に立ちつつ、(1) 魔女狩り期における自然観・女性観の変化 (2) 中央集権化の進行と魔女狩りの関係、という二点に着目して、魔女狩りがアジールの内面化とどのように関連していたかを、考察したい。

考察に当たって、阿部謹也の賤民研究を参照する。阿部は、アジールを至る所に持つゲルマン人の土俗的な世界観が、キリスト教的な一元的な世界観によって抑圧される過程で、特定の職業への賤視が生じた、と分析している。また、賤視は啓蒙主義時代に消滅したという点も、魔女狩りと共通している。こうした共通点の多さは、賤民研究が魔女狩りの考察の補助線となることを示唆すると思われる。

最後に、日本において魔女狩りに相当する現象が少なくとも大規模には生じたことがなかったことが、日本人における「内面」のあり方に独特の影を落としているものと考えられるが、この点に関しても時間が許せば言及したい。

予定された「意図せざる結果」？

—「ヴェーバー・テーゼ」に関する一つの思考実験—

尾上 正人 (奈良大学)

マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、19 世紀までのマクロ構造優位型で決定論的・法則定立志向的な社会科学に対して、ミクロな主体の意志や行為が社会変動に多大な影響を及ぼすことを指摘し、それによって非決定論的な社会科学への道を開拓した点で、同時期の物理学における大発見と同等の価値を有していたと言える。しかしながら、ヴェーバーが自説の展開にあたってプロテスタンティズムの代表的な教説として主要な分析対象としたものは、人間の自由意志に余地を残したメソディズムでもパプティズムでもなく、カルヴィニズムにおける予定説であった。この予定説こそは実は、古代よりの神学史上において——例えば後期アウグスティヌスのペラギウス派への論駁に代表されるように——、(マクロ社会ではなく神の意志・摂理という形での) 構造的決定論の側に確固として立つものであった。

神学もその時代なりの一つの社会理論であるとする立場をとるならば、ここから逆説的な事態が生じざるを得ない。何となればヴェーバーは、構造的決定主義に立って人間の自由意志を否定する教説が資本主義の成立に果たした役割を、その教説を奉ずる人々のマクロ構造からは独立した(つまり、自由な)意志と行為が逆にマクロ社会に影響を及ぼしそれを変動させるという方法論・社会観に基づいて、描き出そうとしたことになるからである。要するに、自らの社会観の対極にある社会観を奉じた人々の行為とその結果を、自らの社会観に忠実に分析したのである。そして、自由な人間行為とマクロ構造との関係は、「意図せざる結果」論においてこれもまた逆説的に接合されている。すなわち、自由意志に基づく信者たちの行為は、意図したとおりの結果をもたらすという点によって如上のヴェーバーの方法論・社会観が立証されるのではなく、むしろその意志(例えば金銭的禁欲)とは懸け離れた、さらには正反対とも言える結果を招来したことが、魅力的な筆致で説かれている。

しかし、ヴェーバー社会観の対極にある予定説の側に立つと、様相は一変してしまう。資本主義の成立は、予定説を奉ずる個々の信者たち(とりわけ企業家)にとっては行為遂行後短期的には「意図せざる結果」であっても、マクロ構造の人格化としての神の予知能力(foreknowledge)は絶大であるから、神にとっての「意図せざる結果」では徹頭徹尾あり得ない。さらに言えば予定説は、人間の自由意志を認めないので、行為者の意図は常に、それをも生ぜしめる神の意図へと回収・還元されてしまう論理を有している(例えば、ファラオを頑なにしたように)。したがって、資本主義の成立という結果は、行為者にとっては「意図せざる結果」であっても、神にとってはまさしく意図したものであり——幾分諧謔的に言えば予定された「意図せざる結果」であり——、さらに世俗内禁欲への意志と行為も神のなせる業でしかない。この仮想的な、カルヴィニスト行為者自身による意図と結果の事後的解釈は実は、構造決定的社会理論の代表格である(後期)マルクスやエンゲルスにおけるプロテスタンティズムと資本主義の関係規定と論理構造を同じくするものになる。

重要なのは、予定説を信奉した者たちにとって自らの意志・行為はもともと、個人の意志・行為に重きをおくヴェーバー的社会観(あるいはそれを継承した理解社会学や、後代の合理的選択理論)ほどには独立自存のものとして重要視されておらず、むしろ今日の文脈におけるマクロな「社会」(彼らの認識では神)に依存・決定されるものだったのであり、したがってまた仮に「意図せざる結果」が生じたとしても、彼ら自身にとっては神の摂理の産物として受け止められるに過ぎなかったということである。この「意図せざる結果」の、当事者(カルヴィニスト)と認識者(ヴェーバー)にとっての重要度の落差は、決して忽せにできないものである。

ブリコラージュ再考

—宗教の戦争論的分析についての試論—

岡本 亮輔

(筑波大学大学院 人文社会科学部 哲学・思想専攻 宗教学・比較思想学分野)

社会学のグランドセオリーとして提示されたB・ウィルソン流の世俗化論は、ソシエタリゼーションの進捗に伴う宗教の私的領域への撤退、つまり個人化を論じていた。だが、1980年代以降、世界規模でのいわゆる宗教復興に注目した再聖化論の立場から厳しい批判をつきつけられる。こうして世俗化論争は激化し、現在では、個人化／再聖化という相反する二つの過程を整合的に説明できる理説の考究が、宗教社会学の喫緊の課題となっている。このパラドクスを解くためには、山中弘やJ・カサノヴァが論じるように、世俗化論から啓蒙主義的・近代主義的偏向を除去し、近代社会において流動化・多次元化した宗教性を包括的に把握できる視座の構成が必要だと思われるが、本発表では、宗教社会学理論における「ブリコラージュ」概念の再考によって、このポスト世俗化論の宗教の分析枠組を構想してみたい。

一般的には「あり合わせの材料による素人仕事」を意味するブリコラージュは、個人化の説明原理として、Th・ルックマンによって宗教社会学理論に導入された。以降、S・ブルース、J・ベックフォード、伊藤雅之などによって様々に展開されるが、彼らの議論は「宗教消費論」として特徴づけられる。つまり、「個人が、自らの意思・嗜好にしたがって異なる文化伝統に由来する宗教表象を動員し、それらをパッチワーク的に結合する作業」としてのブリコラージュ論である。ここでは、ブリコラージュ的宗教性は、自律的個人の趣味的・心理的操作の産物とされ、論者によってはその非政治性・脱政治性が積極的に論じられる。そしてその結果、再聖化運動全般が、専ら「反近代」を志向する熱狂的・反動的な運動として解される状況すら生まれている。

これに対し、M・ド・セルトーなどの消費社会・大衆文化研究では、消費活動自体が不可避的に政治性を孕むことが論じられ、それに基づいて消費の中の政治的ブリコラージュが焦点化される。複雑化した現代社会において自己の存在や生の意味を獲得するには、体制の与える文化的生産物(テキスト)を再解釈(ブリコラージュ)する必要がある、ブリコラージュは、現代では誰もが関わらざるをえない「記号論的ゲリラ戦」とされるのである。そして、ド・セルトーは、このような観点から現代文化を捉える視座を「文化の戦争論的分析」とする。

発表者は、この観点こそがポスト世俗化論の宗教分析の要点になると考えるのだが、これを現代宗教論に組み込むには、「宗教領域では、いかなる主体が、何をブリコラージュしているか」をより詳細に考える必要がある。D・エルヴェ＝レジェやL・ヴォワイエによれば、ポスト世俗化状況では、フランス・カトリックのような制度宗教も、その言説を近代的価値観と親和的なものへとブリコラージュしており、ブリコラージュの主体は個人に限定されない。さらに、ブリコラージュがアイデンティティ形成のための闘争であることに注目すると、そこで真に賭けられているのは、伝統的・制度的宗教が独占してきた文化資源、つまり当該地域・社会をその基層から文化的に枠づける「集合的記憶」だと言える。

以上の議論を、近代社会における宗教自体の機能分化を論じた井門富二夫の理論に基づいて、「宗教の戦争論的分析」としてまとめてみたい。つまり、制度・組織・個人の三者が、近代社会の中でアイデンティティを鮮明に示すために、文化宗教である集合的記憶をブリコラージュし、公共空間を目指す闘争状況として現代宗教を考えるのである。ただし、このモデルは、西欧の宗教・文化状況に由来する諸理論に基づく理念型的なものであり、したがって、これが個別的・具体的研究との往復運動の中で修正・再構成される必要があることは言うまでもない。

「スピリチュアリティ」を語る文脈

安藤泰至 (鳥取大学)

さまざまな学問領域において「スピリチュアリティ (霊性)」という語が語られるようになったのは、日本では一九九〇年代以降のことである。現在においては大衆文化の中にも浸透しつつあるとはいえ、この語はまだまだ学者・知識人や専門職の人々がそれぞれの特定のコンテキストの中で用いている概念だといえよう。しかし、この語はそれぞれのコンテキストによってかなり異なった意味で用いられており、時には互いに矛盾していることもある。この語をどのような人々がどういった意味で用いているのかについてはすでにいくつかの先行研究 (葛西・西平・安藤治など) があるが、本発表はそれらの研究の土台の上に、この語をめぐるポリティクスについてのさらに統合的な鳥瞰図を描くことを目指すものである。世界的に見ても、この語を使う人々は主として三つのグループに分類できる (「スピリチュアリティ」という語が外来語であるという日本の事情には別個に考察すべき点があるが、ここではその問題には深入りしない)。すなわち第一に、医療・福祉・教育といった広い意味でのヒューマンケアに関わる専門職の人々。第二に、広義の宗教学に関わる研究者や諸宗教の立場からの論者。第三にニューエイジや新霊性運動の主唱者たちである。第一のグループに属する人々は、スピリチュアリティの主たる要素のうち、「生 (や死) の意味と目的の追求」という側面をもつばら強調し、「超越的次元の存在、自覚」のような、宗教により近接した側面をおもてに出さない傾向が強い。第二のグループに属する人々は多様であるが、第一のグループが強調しない「超越的次元の存在、自覚」をつねに念頭におき、「宗教」との連続性および非連続性にかなり敏感であるという共通点が見られる。また宗教学者の場合は、「スピリチュアリティ」という語を、宗教学における研究対象の拡大や研究の包括性を高めることに寄与する分析概念として用いる傾向が強い。それに対して第三のグループにおいてはむしろ、「宗教からスピリチュアリティへ」とか「これからはスピリチュアリティの時代だ」といったように、この語が一種の運動のスローガンとして用いられることが多い。第三のグループのこうした用法は、第一、第二のグループにも直接のおよび間接的な影響を及ぼしており、そのためにある種の「ねじれ」現象が生じている場合もある。とりわけ、「宗教／スピリチュアリティ」の対比の中に「制度的なもの、固定的なもの／非制度的 (個人的) なもの、流動的なもの」という対比が持ち込まれることによって、暗黙のうちに第三のグループが用いる運動のスローガンとしてのスピリチュアリティ (宗教は悪い (古い) もの、スピリチュアリティは新しい (良い) もの) 概念が入り込んでいくことに注意しなければならない (本来の対比は、むしろ「スピリチュアリティ (霊性)」と「宗教性」の間でなされるべきである)。この問題は、「スピリチュアリティ」という語のなかに二つの異なった次元の意味が含まれており、それによって「宗教」との包含関係が異なった様相を呈することに関係している。すなわち、この語を「人間に本来備わっているある種の普遍的特性 (霊性)」ととらえると、それは「宗教」を包含する上位概念となる。ところが、この語に「そうした霊性への (宗教とは異なった) 新しいアプローチや態度」という意味をもたせた場合、それは「宗教」とは区別された (重なり合いのない) 概念となる (また、それを「宗教」ではなく「宗教性」と対比するならば、それぞれの定義の仕方によっては「スピリチュアリティ」が「宗教性」の方に包摂される下位概念となり得る場合もある)。本発表ではこうした分析をふまえて、この概念の今後について、いくつかの展望を述べてみたい。

欧米社会学における宗教研究と宗教調査

真鍋一史 (関西学院大学)

この報告では、欧米社会学における宗教をめぐる主要な概念・命題・理論から「世俗化(secularization)」「宗教的多元主義(religious pluralism)」「宗教市場(religious market)」の3つを取りあげて検討する。

I. 世俗化

1. 世俗化という議論については3つの側面が指摘できる。

(1) 世俗化は、一方で諸悪の根源として非難されながら、他方で自由と開放をもたらすものとして歓迎される。

(2) 世俗化は、一方で社会の近代化にともなう世界的・普遍的な現象とされながら、他方でヨーロッパのキリスト教社会で起こった地域的・特殊な現象とされる。

(3) 世俗化という同じ用語が用いられながら、それが同じ現象を意味しているかという点、必ずしもそうではない。それは、一方で「教会の会員数の減少」「教会活動への参加の低下」を意味するとともに、他方で、人びとの心のよりどころの「超越的なもの」から「内面的なもの」への移行を示唆している。(Dekker 1987, Haller 1990, Verweij 1998, Wallis and Bruce 1992, Lawrence 1998)

2. 世俗化という命題に対する反論

(1) 「近代化が世俗化をもたらす」という命題については、近代化の「何が」原因で、世俗化と呼ばれる現象のうちの「何が」起こったのかについての分析的な議論が必要である。

(2) 「伝統的宗教は衰退したが、新しい宗教運動が起こっている」

① 神秘主義、オカルト、秘教といったニューエイジタイプのものの出現(Robbins 1998, de Hart 1993)

② 原理主義的宗教の増加(Gellner 1992)

(3) ヨーロッパと北アメリカの比較からの議論

① 世俗化が進展しているヨーロッパから見れば、いぜんとして宗教活動が活発な北アメリカはこの命題の例外。(Bruce 1999)

② 北アメリカでは宗教が活力を維持しているため、この命題にたいして反論。(Berger 2001, Brown 1992, Casanova 2001, Davie 2002, Finke 1992, Stark 1999, Stark と Iannaccone 1994)

(4) 「それぞれの国・社会の文化的・歴史的な伝統が、近代化の宗教に与える影響を促進することもあれば、阻止することもある。」(Roof 1985)

(5) 「世俗化という現象は、社会的レベル、宗教団体レベル、個人的レベルの3つのレベルに分けて分析する必要がある。個人的レベルではさまざまな宗教のなかから個人が自分に合うものを選んで再構成する「宗教的寄せ木細工(religious bricolage)」あるいは「アラカルト式宗教(a religion à la carte)」という方向がでてくる。(Dobbelaere 1981, 1995, 2002)

II. 宗教的多元主義

後期近代社会では伝統的な教会や宗教的な制度にとってかわって、「見えない宗教(invisible religion)」が現われる(Luckmann 1963, 1967)。つまり、伝統的な宗教形態は弱体化していくが、人びとの宗教心が衰えていくのではない。人びとは高度に分化した多様な社会のなかで、それぞれの宗教を求めていく。この考え方は宗教研究の門戸を広げた。

例えば、「発展の進んだ社会では人生の意味や目的を深く考える人びとが増えるが、そのよう人びとは伝統的な信仰や既成の宗教団体には背を向ける人びとでもある。」(Inglehart 1997, Norris と Inglehart 2004)。

III. 宗教市場・供給サイド・合理的選択

「教会が市場を独占している場合は、会員を満足させようとする意識が低く、市民の宗教活動は衰退化していくのに対して、教会間に競争がある場合は、市場でのシェアを求めて教会が努力するので、市民の宗教活動は活発化していく。」(Finke と Stark 1988, Stark と Iannaccone 1994, Stark 1997, Warner 1993)

この理論の登場以来、宗教をめぐる社会学の議論は再び活発になってきている。しかし異文化比較の視点からする方法論的な議論は意外なほど少ない。ここでは、宗教をめぐる国際比較調査について検討を進める。

グローバル化時代の到来と新宗教の展開 ―妙智会教団の事例―

李和珍 (国学院大学大学院)

妙智会教団は、先祖供養を中心とする霊友会系新宗教であり、1950年に霊友会を脱会した宮本ミツを会主とする教団である。戦後の社会変動のなかで信者を増やしてきたが、グローバル化が進行するなかで、その活動方針にも変化が観察される。

本発表は、妙智会教団に関する先行研究史の傾向を簡単にまとめたうえで、最近の活動の変化がどのような面で起こっているかについて示す。そのために、妙智会教団の機関紙である『妙智会』(月刊)を分析する。『妙智会』(当初は『妙智』)の1950年の創刊号から2005年までの記事内容を主な分析対象とする。とくにそこに登場する教外の人物・団体・会議・活動がどのように変化してきたかを分析することで、妙智会教団が自教団を社会のなかになにのように位置付けるかについての、時期ごとの変化を明らかにする。

妙智会に関する先行研究は、霊友会や立正佼成会に比べると、非常に数が少なく、80年代以降はほとんど研究がないと言ってもよいほどである。妙智会に関する研究傾向は、教団内と教団外に分類することができるが、まず、教団内の文献・資料については、3つの特徴がみられる。①教祖に対するの文献が大半を占めている。教祖の自伝や写真集、そして教義や教典として出版されているものも教祖の宮本ミツの法話集や歌集である。②機関紙であり会報としての機能をもつ『妙智会』と、信者の体験談を主につづった機関誌『みょうち』(季刊)が情報発信の中心である。③教学研究についてはあまり力を注いでない。このような特徴から、妙智会教団は教学を教えるより、教祖の言葉、信者が先祖供養のために行う実践をもっと大事にする傾向がみてとれる。

教団外の研究の特徴は、①教団史と教祖伝の概説書、②体験談を主に扱っている『みょうち』の70年代末までの資料を対象にして妙智会教団の持つ先祖観を明らかにした研究や主な教理である先祖供養に関する研究、③妙智会信者がもっとも集中的に居住している地域(山形県湯野浜)の実態調査を通して定着した過程や宗教意識、既成宗教との関わりなどを分析した研究、などがあげられる。

教団外の研究は、90年代以降にはほとんど見られなくなった。いわゆる<新新宗教>論などの出現に見られるように、この時期は新宗教が新しい展開の段階を迎えたという考えが宗教社会学では示された。しかしその時期の妙智会教団の実証的研究がない。そこで、90年代以降の社会変化に対応して妙智会教団はどのような変化をみせているのかを調べるために、今回は開教当時から毎月発行されている会報の分析を行った。会報は、毎月本部で行われている供養会での会長の言葉、教団の行事・活動の報告、体験談、行事のお知らせなどで構成されている。実際に教団が行っていることの一部が会報に載せられるわけだが、これは教団が選びだした情報を掲載していると解釈できる。つまり、会報は教団の公式メッセージの情報発信の場であり、教団のアイデンティティを表現しているものと考えられる。信者に対しても自分たちがどのようなネットワークの中に位置づけられ、活動をしているのかを知らせる場として機能している。

創刊号から現在にいたるまで、先祖供養に関する会主の言葉や教え、信者たちの体験談には大きな変化は見られない。だが、日蓮聖人との関係、身延山、思親閣、新宗連との関係を継続する一方で、国連との関わりとその活動の変化が、1990年前後から見られる。とくに、1990年に発足した「ありがとう基金」以降、世界的レベルの社会活動、その広がり記事の中に目立ってくる。教理や実践のやり方においては変化を求めない妙智会教団であっても、グローバル化・国際化時代の社会変動には対応していこうとする面として理解できる。

仏教寺院のナレッジ・マネジメント

水元明法 (北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科 博士後期課程)

現在、仏教寺院は危機的状況を迎えていると言われ、経営していく上で様々な問題を抱えている。たとえば後継者問題が上げられる。各宗派の広報誌でも、後継者募集の知らせが毎月のように掲載されているし、後継者を仲介し紹介するネットワークを整備している宗派もある。およそ8割の寺院が、寺院としての収入のみでは生活が成り立たず、これを含む様々な理由から、後継者がなく、無住となっている寺院が増加している。寺院の統廃合をすすめようとする宗派もある。寺院所在地の過疎化による檀家数の減少や、現代人の宗教離れ、そして「葬式仏教」と揶揄されるに代表する宗教そのものへの不信感など、寺院を経営する上での様々な問題は、どれ一つとっても非常に重要なものである。

かつての寺院は、様々な機能を持っていた。それには、まず仏教とふれあう場としての機能をはじめ、教育大国であった江戸時代を支えた寺子屋に代表される「教育の場」としての機能や、聖徳太子建立の四天王寺が持っていた福祉、病院、医療施設としての機能、そして神仏に奉納するために発展した能や田楽などの上演の場としての機能があげられる。

21世紀は心の時代とも言われ、心の充足を得る場所として、寺院機能に求められるものが多くあると考える。だが現在、多くの寺院は葬儀や法事の場に特化しており、機能が縮小したと言っても過言ではない。在来仏教を支えてきた檀信徒の、寺院に対する意識の低下も現れている。これが、檀家・信徒が寺院から離れていく原因になっているとも考えられる。このような現状から、今一度、組織の経営について考えなおす必要がある。

近年、組織経営では「知識」が重要なキーワードとなり、ナレッジ・マネジメントが普及し、定着し始めている。ナレッジ・マネジメントとは、既存の知識を共有し活用する「知識管理」をベースに、知識を新しく創造し続けることを目標とする、「知識経営」を意味する(野中・梅本2001)。ナレッジ・マネジメントが普及してきた背景には、ドラッカー(1993)が指摘する「知識社会」の到来がある。知的財産権が叫ばれる現状にみられるように、イノベーションに高い価値が与えられ、社会システム全般の変革が起きている。

社会に対し、知識という新しい価値を提供するナレッジ・マネジメントは、営利、非営利、組織規模の大小を問わず適用可能である。ドラッカーは、著書『非営利組織の経営』日本語版の序文において、「いまも機能している最古の非営利機関は、日本にある。奈良の古寺がそれである。」と述べている。さらに非営利組織は人間そのものを変える事を目的とする「人間変革機関」であるとし、社会的役割の重要性を指摘している。また、人間変革には自発的な参加や個人的なコミットメントが必要であり、これらを扱うには行政や営利組織は向かず、中心的役割を非営利組織が担うと主張する。

本発表では、人間の知的な活動である「信仰」を扱う寺院を非営利組織と捉える。寺院がおこなう具体的な社会貢献事業をケース・スタディという形でとりあげ、その使命と目的が成立するプロセスを明らかにし、組織的知識創造理論をフレームワークとした分析結果を示す。また、社会貢献事業を寺院が行う事の有用性を述べるために、拙稿[寺院経営の問題と対策-アンケート調査の結果報告-]より抜粋し、調査結果に試みた因子分析と重回帰分析の結果を併せて述べる。

日本における宗教ボランティアリズムの可能性

—仏教の国際協力活動及び仏教系 NGO・NPO について—

ランジャナ・ムコパディヤヤー

(名古屋市立大学大学院 人間文化研究科)

日本仏教の社会参加において国際協力活動・海外でのボランティア活動が重要な活動分野である。戦前にも日本仏教団体による海外での慈善事業があったが、戦後において日本仏教の国際協力活動が、戦後日本の国際主義・平和思想に理念的に、また高度経済成によって経済的に支えられて大きく発展してきた。さらに、諸国の内戦・紛争、核兵器拡散、環境破壊問題などの国際情勢が仏教団体による国際ボランティア活動に拍車をかけた。とりわけ、70年代後半・80年代におけるインドシナ難民救援への取り組みが日本仏教の国際ボランティアを活発化させるための大きなきっかけとなった。また、80年代以来、日本でもNPOやNGO活動が社会的に認められ、1995年の阪神大地震がきっかけで、国内のボランティア活動がさらに本格化していく。このような時代において各仏教団体が、従来の海外支援活動及び国内でのボランティア事業をNGO(民間非政府組織)やNPO(民間非営利組織)という法人組織にするというような傾向が高まりつつである。国際支援事業を目的として設立された仏教系NGOまたはNPOとして曹洞宗のシャンティールボランティア会(SVA)、蓮華院国際協力協会、仏教救援センター(BAC)、アーユス・仏教国際協力ネットワークなどの事例がある。NGO法人を設立して日本の仏教団体がアジア諸国をはじめ世界各地では救貧、災害救済、教育や医療などの様々な分野において支援事業を行っている。さらに、日本の仏教団体・仏教系NGOは海外の仏教徒、仏教団体、NGOや民間組織とのネットワークを通じて各種の国際協力事業(災害援助、開発事業など)に取り組んでいる。

「宗教ボランティアリズム」は、宗教的思想に導かれて個人や団体によるボランティア活動への参加のことである。(著者定義)本発表では、日本仏教による海外でのボランティア活動への参加を取り上げて、日本における宗教ボランティアリズムの現状と課題について論じたい。そのために、国際ボランティア活動を行っているいくつかの仏教系NGO及びNPOの事例を通じて日本の仏教団体による国際協力活動への参加について考察を行う。

日本の仏教団体による国際協力活動はグローバル化・情報化された社会における仏教の社会参加の展開を示している。仏教団体による海外での支援事業が日本国内におけるいわゆるNPO・NGO運動の発展に大きく貢献していることが注目すべきである。国際ボランティア活動への参加が、仏教徒・僧侶及びその教団の社会的覚醒を上向し、その経験と社会意識を活かして国内でも様々なボランティア活動が実施されている。そして、仏教団体は、NPO・NGO団体の創設という時代思潮に乗じて従来の慈善事業を更に発展させようとしている。宗教団体がNPOやNGOを立ち上げる目的は、一般社会に教団の社会活動をアピールするためであり、教団の信徒らに限らず一般の人々から支援(資金提供、ボランティアとしての参加)を求めるためである。さらに、NPO・NGOの設立によって宗教団体としての限界(政教分離の問題)が乗り越えられ、広い範囲での活動が可能になる。日本における宗教ボランティアリズムの可能性と今後の展望また市民社会における宗教の役割について考える際、仏教系NGO・NPO団体の活動が課題になるとと思われる。

戦前期日本における仏教運動のポリティクス

—1930 年代の新興仏教青年同盟の事例—

大谷栄一 (南山宗教文化研究所)

近年、公共哲学研究、公共宗教論、Engaged Buddhism 研究などを通じて、宗教（仏教）の公的役割に関する議論が活性化している。こうした研究動向を参照しつつ、本報告では、戦前期日本の仏教運動の公的役割に関する考察を行う。近代日本仏教は、政治・社会・教育・社会事業（福祉）・医療など、さまざまな領域で公的役割を担ってきたが、ここでは政治領域での公的役割に限定して議論を進める。戦前期日本の政治領域における仏教運動の公的役割を問い直すこと。それが本報告の目的である。その事例として、1931 年（昭和 6）に創設された妹尾義郎（1889-1961）を指導者とする新興仏教青年同盟（新興仏青）の運動を取り上げる。

報告では、最初に、公的役割を果たしてきた日本の「近代仏教」（あるいは「仏教」の近代的形態）とは何かを明確にするため、近代日本仏教史研究をはじめ、近代アジア宗教（仏教）の比較研究を行っているロバート・ベラーや島岩らの研究、Engaged Buddhism 研究を参照し、日本の「近代仏教」の特徴とその公的役割のあり方を整理する。

次に、従来の研究史における本報告の位置づけを明らかにするため、いわゆる「政治と仏教」の問題系に関する先行研究を確認する。この問題系は、近代日本宗教史研究や近代日本仏教史研究の定番的な問題系であり、国家体制・政治制度や政治的イデオロギーと仏教教団、仏教者・仏教教団の政治参加などが問われてきた。今回の報告もこうした先行研究の流れに定位するが、さらに「仏教運動のポリティクス」という別の視点も加味する。

「政治と仏教」の問題系を考察する際、政教関係や政治参加など、国家体制や政治制度との関わりにくわえて、政府当局や敵対者（同調者）、エリート、大衆に対する仏教者や仏教教団の言説や活動がもつポリティクスも検討する必要がある、と報告者は考える。本報告では前者の視点のみならず、後者の視点も用いることで、この問題系に関する、より重層的な分析を提示したい。

以上を踏まえて、事例の分析を行う。

1889 年（明治 22）に広島に生まれた妹尾義郎は、1918 年（大正 7）に伝統教団・顕本法華宗官長の本多日生に師事し、翌年、日蓮主義青年団を結成して、在家の立場から、ナショナルスティックな日蓮主義運動に取り組んでいる。しかし、しだいに社会主義へのシンパシーを強めて日蓮主義を相対化し、1931 年（昭和 6）、新興仏教青年同盟を新たに設立する。1936 年（昭和 11）からその翌年にかけて、治安維持法によって組織が壊滅するまで、全国約 20 の支部、約 400 名のメンバーからなる新興仏青は、妹尾による仏教社会主義の理念の下、仏陀への回帰にもとづく仏教界の改革と資本主義社会の変革を掲げた仏教運動を展開した。

1930 年代の社会状況の下、妹尾たちは、仏教無産政党の提唱（結局は実現しなかった）や、地方選挙への立候補など、具体的な政治参加を志向している。また、反宗教運動との衝突、伝統教団との対立、新宗教との差別化、他の仏教運動（友松円諦の真理運動）への批判など、さまざまな「対決のポリティクス（contentious politics）」（Sidney Tarrow）を通じて、自分たちのポジショナリティを確定し、また、キリスト教の運動（中島重の社会的基督教）との協調、無産運動をはじめとする社会運動との連携を通じて、現世における理想的な共同社会（仏国土）の実現をめざした活動を実践した。

当日は、より詳細な分析を行うことで、戦前期日本の政治領域における新興仏青の仏教運動の公的役割に関する見解を提示したいと思う。

「

満州族シャーマニズム儀礼の変容

—^{グワルギャ}瓜爾佳氏族の^{ジャジ}「家祭」の事例研究より—

楊 紅 (名古屋大学大学院)

満州族の伝統的宗教はシャーマニズムである。その中で、重要な役割を果たす宗教職能者はシャーマンである。満州族シャーマニズムの特徴は「^{ジャジ}家祭」と「^{イェジ}野祭」と呼ばれる儀礼である。

「家祭」と「野祭」は、シャーマンが氏族の人々を率いて行われる儀礼である。家祭で祭る神霊は祖先の神々である。野祭で祭る神霊は、家祭の祖先の神々以外の様々な動・植物の神霊である。家祭には神霊がシャーマンの身体に憑依する「憑依現象」はすでに消えた。野祭にのみ「憑依現象」がみられる。

満州族のシャーマニズム儀礼である家祭と野祭はさまざまな変化を遂げてきた。乾隆 12 年 (1747 年) に、法典的性格をもつ『欽定満州祭神祭天典礼』の頒布によって、家祭は清朝皇帝たる愛新覺羅氏族の「家祭」の様式に基づいて統一された。他方、野祭は、『欽定満州祭神祭天典礼』に規定された以外の神々を祭っていたため、国家の激しい弾圧を受けた。その結果、現在野祭はわずか十数の氏族で残存している。

1950 年代に始まる「迷信を棄てて思想を解放しよう」という政治運動や文化大革命によって家祭も政府に激しく弾圧された。だが、1980 年代からの改革開放政策とともに、政府が少数民族の風俗習慣を尊重する政策が実施された。それ故、満州族シャーマニズムの祭祀儀礼の「家祭」と「野祭」は復興の傾向にある。

本発表は、2006 年 1 月 9 日～11 日の三日間に、復興した^{グワルギャ}満州族瓜爾佳氏族のシャーマンによって行われた家祭を詳細に報告する。^{グワルギャ}瓜爾佳氏族は中国東北地方吉林省吉林市永吉県烏拉街鎮韓屯村に居住している。この家祭は 6 年あるいは 12 年 (子年) おきに行われる儀礼である。今回の家祭は^{グワルギャ}瓜爾佳氏族の 6 年ぶりに行われたのである。

満州族の家祭は一つの村の氏族を伝承の単位として行われるのである。満州族固有の氏族制度はムコン (穆昆) である。ムコンの基本単位は一世帯である。数百年間の「漢化」のため、現在満州族固有の氏族制度がほぼ崩壊している。満州族が居住する辺境の地域に満州族固有の氏族制度が残存している。^{グワルギャ}瓜爾佳氏族では、その氏族制度がうまく保存されてきた。それは家祭を通してあらわに再現する。

本発表は^{グワルギャ}瓜爾佳氏族の家祭の事例を通して、家祭と満州族の氏族制度との関連を明らかにする。

韓国の福音派プロテスタントによるホームレス伝道

白波瀬 達也

(関西学院大学大学院 社会学研究科博士 課程 後期課程)

日本の宗教社会学は 1990 年代に入ると「ニューエイジ運動」「スピリチュアリティ」といったものが研究対象としてクローズアップされるようになった。これらはいずれも教団という組織形態をもたない団体やネットワークで、それ自体が宗教ではないが、そこに「宗教的なもの」「スピリチュアルなもの」を見出し、宗教社会学の研究すべきテーマとして扱われるようになった。報告者はこのような宗教＝制度宗教というリジッドな視座を解体する宗教社会学の新しい動向を支持しつつも、重大な見落としがあるのではないかと危惧している。それは「階層に対する視点」である。戦後の日本の経済成長や高学歴化、情報の多様化によって自己実現を目指す「自律的で主体的な個人」が生み出されてきた一方で、「勝ち組」と「負け組」とに腑分けしていく昨今の新自由主義の貫徹が新たな「競争の落伍者」を生み出してきている。90 年代中頃から社会問題として認識されるようになってきたホームレスはまさに競争の落伍者の典型である。ホームレスの生活に目を転ずると、そこには極めてダイナミックな制度宗教の活動を見て取ることが出来る。本発表では従来の日本の宗教社会学では言及されることのなかったホームレスと宗教者との相互作用に焦点をあて、再び階層への視点を取り戻すことの意義を提示する。

現在、ホームレス支援の主たるエージェントは労働運動に端を発する「野宿者支援運動」(以下、「運動」と福音派プロテスタントによる「ホームレス伝道」(以下、「伝道」)の二つに大きく分類することができる。既存の社会学の研究のなかには「運動」に着目したものがいくつかあるが、筆者は未だ明らかにされていない「伝道」に着目する。寄せ場、非寄せ場を問わず、ホームレスが集住する地域には福音派プロテスタントによる「伝道」がみられる。その多くが韓国のペンテコステ派教会によってなされている。韓国キリスト教の日本への移入過程を研究したマーク・マリンズ (1995) は、1980 年代から韓国のペンテコステ派が日本で活性化している事実を認めつつも、「いまだに多くの日本人が韓国人に対して人種的な優越意識を有しており、その日本人がかつての植民地から来た宗教的指導者によって支配された教会に宗教的慰めを求めるとは容易に想像し難い」と述べており、今後とも都市大衆のニーズを満たすのは土着の宗教的伝統に根ざした新宗教だと結論付けている。このマリンズの説明はホームレス問題が顕在化する前の日本社会では有効たりえただろうが、現在においては若干の訂正を必要とする。たとえば、日本で最もホームレスが集住する大阪の釜ヶ崎では約 10 の団体がホームレス伝道に携わっているのに対し、新宗教による活動や既成仏教の活動は皆無に等しい。このことから推察されるのは、福音派プロテスタントの活況が在来宗教の空洞化の上に成り立っているということである。

ホームレスが集住する地域で韓国の福音派プロテスタントの伝道活動が活発に見られることは既に述べたが、「運動」の影響力と「伝道」の浸透レベルには因果関係があるということにも触れておかななくてはならない。青木秀男 (2006) が「状況規定も自己尊厳の感覚も、自己と社会状況の相互作用の産物である」と述べているように、「運動」の影響が強い寄せ場では伝道集会への参加が盛んに見られても実際の入信へと至るケースは極めて稀である。なぜならそこには苦難の原因を外在化するような文化装置が根強く機能しているからである。他方、「運動」の影響が寄せ場に比べて弱い都心部などでは目覚ましい数の信者を生み出している教会もある。したがって本発表ではホームレスの意味世界の構築に大きく作用する「運動」の存在も射程に入れながら、韓国の福音派プロテスタントによるホームレス伝道の実態を社会学的に考察していく。

カトリックであることとは

—中国陝西省のカトリック村における日常的宗教実践と宗教意識—

李 雯文 (京都大学人間・環境学研究科博士課程)

宗教との関わり方は、人によって異なる。ある人々にとって、「カトリックである」ことは洗礼を受けたことしか意味しない。カトリックの教義やミサへの関与の仕方も異なっている。また、同一人物であっても、一生のうちで関与の仕方が変化する。本発表は、中国陝西省のカトリック村に焦点をあてる。1860 年代に開村祖が中国人神父によって洗礼を受けて以来、この村は代々カトリック信仰を保ってきた。村に住む 18 歳以上のカトリック信徒 113 名を対象に行ったインタビュー調査に基づき、村人の個々人の日常的な宗教実践と宗教意識を検討することを目的とする。

カトリック信徒の宗教生活はさまざまな掟によって規定されている。もっとも親しまれるのはいわゆる十戒と聖教四規である。十戒は信徒の日常行動に対するおきてであり、四規は信徒と教会組織との関係を具体的に規定したものである。十戒は比較的抽象的なおきてであるため、個人の実行状況に関して他人が深く立ち入ることは困難であるが、四規は観察や聞き取り調査によって考察することが可能である。本発表では村人が教会に通う状況、告解と聖体を受ける状況および日常的な祈祷の実施状況を詳しくみていく。また、信徒の宗教生活を代表するもうひとつの指標である祈祷についても検討する。

さらに、「外教村」、すなわち、非カトリック村との区別に対する考え方、および信仰の役割についての考え方という個人の側面も検討する。村人はカトリック村と非カトリック村の違いについて、以下の 4 点にまとめられる。①気風が良い。犯罪が少ない。けんかが少ない。言葉が乱暴ではないこと。②人の心はよい。道德倫理のレベルが比較的に高い。寛容な心が持てること。老人を敬うこと。嫁姑関係が比較的に良いこと。③習俗の違い。日曜日に正装して教会に通うこと。冠婚葬祭の違い。④文化生活が豊かであること。しかし、自分たちの村を批判する人や違いを認めない人もいる。この人たちは全員道德倫理の低下を嘆く。それら嘆きから道德倫理の点において村への高い期待がうかがえる。すなわち、村人の見方は評価的であるかにせよ、批判的であるかにせよ、カトリック信仰が村の全体の雰囲気、人々の道德倫理観念および村落社会の慣習に対して影響を与えていると認識されていることが分かる。

「カトリックである」ことの意味を、教会に通うことや告解と聖体受領の実施状況などの実践レベルと、自村と他村の区別や信仰の意味に対する考えなど認識のレベルの両方から考察する。旧来の伝統的な共同体や家・氏族の絆の中で生きていた村人の生活に、キリスト教の枠が与えられた。村人が教会に通い、平和を求め祈祷し、罪を定期的に告白することは生活の中で重要な位置を占めている。そのうえ、キリスト教は道德倫理や精神的な側面でも大きな役割を果たしていること。

他の時代や社会にみられるように、教会は世俗権力と結びつくことはないが、村落社会に深く根付いて、伝統的な慣習や生活様式を変革しようとした。村人もキリスト教の教義に即して日常生活を再編成しようとする。この変革の最大の武器が「罪」という概念であり、それは天国と地獄あるいは煉獄というイメージと結びついて、人々の日常生活に大きな圧力をかけている。しかし、教会に代表される権力は個々人の生活にも介入しながら、個人の人格は認められる。このことは、カトリックの教義や儀礼への関与の仕方は個人によって異なり、また、同一人物であっても、一生のうちで関与の仕方が変化するということから明らかになるのではないかと考える。

沖縄バプテスト連盟と土着信仰の関係に見るキリスト教受容

古澤健太郎

(同志社大学神学研究科 博士課程後期課程 歴史神学専攻)

戦前戦後を通じ、沖縄のキリスト教は2つの問題との対峙を迫られてきた。ひとつは今日もなお続く異文化支配であり、もうひとつは、沖縄土着の信仰である。「ユタ」と呼ばれる民間シャーマンの影響力が極めて色濃い沖縄で、キリスト教を始め、外来の宗教は、常に土着の信仰とのかかわり方を試行錯誤させられてきた。

これまで、沖縄のキリスト教による土着信仰へのアプローチは、その動機や発端の曖昧なままに語られてきたと言ってよい。しかし資料や文献を調査することで、そうした両者の接近が、沖縄の社会状況と深く関係していることが明らかになる。例えば、沖縄のキリスト教は戦後かなり早い段階で活動を開始しており、その結果として、沖縄土着の信仰に対する対応をいち早く求められている。このことが沖縄のキリスト教と土着の信仰の関係を綿密にしたことは間違いないが、そうした早期からの活動は、軍チャプレンを通じて米軍との強い結びつきや援助があったことに起因しているのである。また、琉球政府などの政権下において、キリスト教団体は公的機関として活動していた時期もあり、他宗教と比べて、極めて有利な活動状況にあったということもこれを後押ししている。

土着の信仰に対して強い関心をもって活動する傾向は、バプテスト派の教師たちに多い。とりわけ戦後、彼らが設立する「沖縄バプテスト連盟」が他のキリスト教諸派に比べ、外国人宣教師団の影響から最も早く抜け出したということが、土着信仰と彼らの関わりを密接なものにしている。海外援助のほとんどを拒絶して独立するという困難な道は、結果として、「沖縄自らが導き出すキリスト教」への一歩を踏み出すことに繋がった。他団体では、外国人宣教師団の指導と影響により避けられがちだった試みである。ここでも、海外からの援助に対する依存、独立という沖縄特有の社会問題が、キリスト教と土着信仰とのかかわりにおいて、その結果を分け隔てている。

ではバプテストの指導者たちは、どのようにしてキリスト教の立場から沖縄の土着信仰への接触を試みたのだろうか。戦後、バプテストのオピニオンリーダーであった照屋寛範は、過度の経済的、精神的負担を強いる沖縄土着の信仰を痛烈に批判しながらも、沖縄の人々が持っている霊に対する知識や経験を否定しない。いわば照屋寛範の神学には、神や聖霊と同じく、実際に害をなす悪霊もまた、リアルなものとして息づいているのだ。また、医師でもあった与那城勇は、沖縄の伝承と聖書やキリスト教が持つ共通点を挙げ、沖縄の人々がキリスト教に対して持つ異文化感を解消しようと試みた。与那城勇の著作は初版後15年経ってからも再版されるなど、沖縄では根強い人気を保っている。

沖縄では、本土に比べて、キリスト教の持つ「異質さ」が非常に薄いと言われている。キリスト教は、クリスチャンであれそうでない人であれ、沖縄の人々にとっていまでも身近な存在である。しかしこれまで、その理由は曖昧なままにされてきた。米軍による支配の歴史が沖縄とキリスト教を近づけたことは間違いないが、そこにどのような作用があって現在に至るのかは、いまだ明確にされていない。

本発表では、

- 1・異文化支配や基地問題に代表される、沖縄特有の社会問題や歴史背景
- 2・沖縄のキリスト教が、土着の信仰に対して積み重ねてきたアプローチ

以上の2点を調査、分析し、沖縄におけるキリスト教と土着信仰の関係を歴史の上に位置づけることで、今後の沖縄研究、キリスト教研究のための土台をつくりたい。また、沖縄とキリスト教の間にある異質性の薄さ、壁の低さといったものが、どのようにして生まれたのかを明確にすることができるだろう。

戦後台湾における日本宗教の展開

藤井健志 (東京学芸大学)

第二次世界大戦前の台湾は日本の植民地であったために多くの日本の宗教が活動を展開していた。日本の敗戦とともにそれらの多くは台湾から去ったが、台湾人が活動を継承し、台湾にほとんど日本人がいない時代にも独自の活動を続けた宗教がいくつかある。またその後の戒厳令が布かれていた時代には、比較的多くの宗教の日本人布教者が台湾にやってきて活発に活動を展開した。さらに 1987 年の戒厳令解除後に台湾で活動を始めた教団もある。この他に布教活動とは言えないものの、台湾で亡くなった日本人の慰霊祭等を台湾で行っている教団もある。伝統的仏教教団の間では日華仏教文化交流協会が創られて、台湾仏教との交流を重ねてきた。これらを合わせると、戦後の台湾においては 25 以上の日本宗教教団が何らかの形で活動を展開してきたことになる。

主なものは仏教教団と新宗教教団で、伝統的仏教教団としては、真言宗、臨済宗、浄土真宗、曹洞宗、日蓮宗および日蓮正宗等が活動をしてきている。このうち真言宗、臨済宗、浄土真宗、日蓮正宗では、やや変則的な形をとっている場合もあるが、いくつかの寺院も開設されている。また新宗教では、天理教、生長の家、創価学会、霊友会、立正佼成会、佛所護念会、本門仏立宗、真如苑、世界救世教系教団、真光文明教団、神慈秀明会、阿含宗等が活動を展開している。必ずしも神道系とは言えないが、いくつかの教団では神道式の祝詞が日本語であげられている。日本で生まれた宗教でありながら、現在は日本とは関係を持たずに、台湾人だけで独自に活動をしている教団もある。

これらのうち信者数の一番多い教団は創価学会で、大体 7 万人～10 万人の信者がいるという。それに次いで佛所護念会が 1 万世帯、天理教が 2 万人～3 万人、日蓮正宗は 2 万人ということである。信者数はブラジルや韓国に比べると全体的に少ないと言える。伝統的仏教よりも新宗教の方が活動が活発である。戒厳令の布かれていた時期に活動を開始した教団が圧倒的に多く、1980 年代に戦後の最盛期を迎えた教団もある。戒厳令解除後に来台した教団はむしろ少ない。ただし教団の法人化(財団法人、社団法人)は解除後が多い。

台湾は主として四つのエスニックグループから構成されている国だが、日本宗教の信者には福建系の漢人(本省人)が多い。少数の客家人や原住民の信者がいる教団もある。いわゆる外省人は少ない。戦前の日本統治時代に日本語教育を受け、日本語に堪能な台湾人が活動の中心を担っている教団が少なくない。特に戦後の活動を開始した当初は、ほとんどの教団でこうした台湾人が重要な役割を果たしていた。ただしそれに依存しすぎた教団はあまり発展しておらず、現在、後継者問題に直面している。

活動を開始した状況を見ると、純粋に布教を目的として始められたケースは少なく、何らかの偶然的な外的要因が関わっている場合が多い。そのため戦前に日本の植民地であったという歴史的背景や、戦後の日台間の交流などの非宗教的問題が日本宗教の展開にかなり大きな影響を与えている。

また台湾の複雑な社会状況と文化状況が日本宗教の展開に難しい問題を投げかけている。標準語である中国語(北京語)が布教にあまり役立たない場合もある。日本宗教の主要な担い手である福建系漢人は、現在でも道教・仏教・民間信仰が混交した台湾の伝統的な宗教に深く関わっており、伝統的な宗教観から日本宗教を解釈する場合も多い。こうした諸状況に規定されながら、日本宗教は戦後の台湾で活動を展開してきたのである。

一神教としてのユダヤ教・キリスト教・イスラーム

－「原理主義」から見た相互認識－

司会者	森 孝一 (同志社大学)
発表者	手島勲矢 (同志社大学)
	小原克博 (同志社大学)
	中田 考 (同志社大学)
コメンテーター	芦名定道 (京都大学)

本セッションでは、一神教としての自己認識を持つユダヤ教・キリスト教・イスラームが相互認識において、どのような同一性と差異性を持っているのかを「原理主義」をキーワードとして考察する。原理主義にかかわる問題を、歴史的・思想的に取り上げ、その語にかかわる実像と虚像とを切り分けながら、それぞれの宗教が近代化や世俗化にどのように関わってきたかについても示唆したい。

1. ユダヤ教の立場から (手島勲矢)

19 世紀に入り、旧新約聖書およびキリスト教・ユダヤ教に対する批判は激しさを増して、その宗教批判は、欧米に新しい社会を構築する原動力にもなった。この近代的な宗教批判は、現代まで続くが、この近代的な宗教批判の時代において、ユダヤ学は誕生した。この発表は、ユダヤ人の近代への適応と、その矛盾を、聖書の一神教理解における議論の文脈で概観しようとするものである。

ある意味、ユダヤ学の反応は、近代的宗教批判が普遍主義・科学主義の名によって主張される視点にキリスト教神学の影響を看取したがゆえの、ユダヤ側のアンチ・テーゼとしてみなすこともできる。そして、それは新約以来の、民族と宗教の関係をめぐる問題の立場の違いともいえるのである。本発表は、東欧と西欧におけるユダヤ学内部の傾向の違い、シオニズム、ヴェルハウゼン批判などをキーワードとして論を展開する。

2. キリスト教の立場から（小原克博）

原理主義という言葉は今日きわめて多義的に用いられるが、その表現そのものは、20世紀初頭のアメリカ・プロテスタントに由来する。したがって、イスラームやユダヤ教に適用されている原理主義は、キリスト教的用語法からのアナロジーとして、その意味内容をキリスト教的な価値・歴史観によって暗黙の内に規定されてきたと言える。「イスラム原理主義」という語がイスラームについての実像より、むしろ虚像を多く提供してきたことは、その一例である。

また、アメリカにおいてさえ、様々な社会変化を経た今日では、原理主義の意味合いはかなり混乱している。そこで、この発表では、明確な起源を持つ原理主義という言葉が、なぜ様々な意味を付加されて今日に至っているのか、その歴史的経緯を素描する。原理主義は反近代的な特徴をもった宗教運動として、近代という時代区分に規定されている。それゆえ、その近代的特質を描写するために、原理主義誕生以前の時代背景にも目を向けていくことにする。

3. イスラームの立場から（中田 考）

本発表では、「原理主義」のアラビア語訳「ウスーリーヤ」を手掛かりに、イスラームの文脈における「原理主義」及び、「原理主義でないもの」の意味を考え、より内在的な理解の可能性を探り、従来の「イスラム原理主義」研究なるものが、対象の実像の記述ではなく、研究者自身の無意識下に抑圧された自我を対象に投影した虚像であることを明らかにする。そうした類の研究は「イスラム原理主義」の語を用いる「世俗主義者」の思想の研究には役立っても「イスラム原理主義」の理解には役立たない。「イスラム原理主義」と呼ばれている現象を理解するためには別の概念枠組み、アプローチが必要とされるのである

「原理主義」の実相——中東・アメリカ・EU

司会者	小原克博 (同志社大学)
発表者	白杵 陽 (日本女子大学) 森 孝一 (同志社大学) 内藤正典 (一橋大学)
コメンテーター	手島勲矢 (同志社大学) 中田 考 ((同志社大学)

同志社大学の 21 世紀 COE プログラム「一神教の学際的研究—文明の共存と安全保障の視点から」は、一神教を思想・神学・宗教研究の視点からだけでなく、一神教とその世界を、文明論、政治・外交、安全保障の視点をも含めて、学際的に研究することをめざすものである。午前の COE セッション「一神教としてのユダヤ教・キリスト教・イスラーム——『原理主義』から見た相互認識」は、一神教における「原理主義」を、宗教思想・神学の立場から分析することを試みるものである。本セッションは、「現実としての『原理主義』」の実相と、それが何を意味するのかを探る試みである。

1993 年に開催された本学会の第 1 回学術大会 (明治大学) では、「ファンダメンタリズム」を巡るシンポジウムが行われ、翌年、『ファンダメンタリズムとは何か—世俗主義への挑戦』、(井上順孝・大塚和夫編、新曜社) として出版された。1979 年のイラン・イスラーム革命、1980 年の米国大統領選挙におけるレーガンの勝利と宗教右派の登場は、イスラーム世界とキリスト教世界の双方において、のちに「原理主義」と呼ばれるようになる宗教勢力が、現実には政治の舞台に登場したものであった。本学会第 1 回学術大会のシンポジウムで「ファンダメンタリズム」を取り上げたのは、世界規模での、このような宗教的・政治的潮流の実相について議論しようとする意図からであったと思われる。

本学会第 1 回学術大会が開催された 1993 年は、S・ハンチントンが「文明の衝突」を発表した年でもあった。ハンチントンの「文明の衝突」論については、さまざまな批判が投げかけられてきたが、1993 年から今日までの世界状況を見る限り、残念ながら彼の予想は的中しつつあると言わざるを得ない。しかも、「文明の衝突」は現時点までは、一神教世界間の衝突となっており、「文明の衝突」の中核に、一神教としての「宗教」、あるいは「反宗教」としての世俗

主義が存在していると言えよう。

1. 中東における「原理主義」の実相（臼杵 陽）

アメリカに攻撃を加えた「9・11」、イラク戦争、イランの核開発、そして、それらすべてに大きな影響を与えているパレスチナ・イスラエル問題。欧米世界は、これらの問題が「イスラーム原理主義」や「ユダヤ教原理主義」と深く結び合わさっていると理解している。これは欧米世界の誤解なのか？急進化し、過激化するイスラームやユダヤ教は「現実としてのイスラーム」、「現実としてのユダヤ教」の実相なのか？

2. アメリカにおける「原理主義」の実相（森 孝一）

今日のアメリカ政治は、「宗教右派」を抜きにしては語るができない。「宗教右派」とその政治的影響力の実相は？アメリカにおける「キリスト教原理主義者」である「宗教右派」と「福音派」の関係は？「ネオ・コン」と「宗教右派」の関係は？「アメリカ原理主義」とは？アメリカにおける「原理主義」と「文化戦争」の関係は？

3. EUにおける「原理主義」の実相（内藤正典）

2004年、イスラームのタブーに挑戦したオランダの映画監督テオ・ファン・ゴッホが、急進的イスラーム主義者（原理主義者）の青年に殺害された。2005年秋以降、「ムハンマドの風刺画」の掲載をめぐる、イスラーム世界はEUを批判し、それに対して、EUでは多様な反応が現れている。近年、EUにおけるイスラームは、EUの原理の一つである多文化主義にとっての「リトマス試験紙」となってきた。その事情は、トルコのEU加盟問題とも深く関係している。EUにおける対「原理主義」の実相は？異質なものを取り込んで協調を図ろうとするEU創設の理念は、どのように機能しているのか？

地域社会における伝統的宗教習俗と新旧宗教

—宮城県仙台市泉区およびその周辺の多角的フィールド調査から—

司会	川又俊則（鈴鹿国際短期大学短期大学部）
コメンテーター	孝本貢（明治大学） 鈴木岩弓（東北大学） 土居浩（ものづくり大学）
発表者	平山眞（神奈川県立衛生看護専門学校非常勤） 小島伸之（國學院大學栃木短期大学非常勤） 寺田喜朗（東洋大学大学院） 大西克明（東洋大学大学院） 高橋嘉代（東北大学文学部阿部次郎記念館） 瀧澤昭憲（東洋大学大学院修士課程修了）

本テーマセッションは、科研費研究「伝統的宗教習俗と新旧教団宗教の重層関係に関する社会学的研究」（平成16-17年度、研究代表者：西山茂、課題番号16530343）の一環として行なわれた、平山・小島・寺田・大西・瀧澤による宮城県仙台市泉区根白石地域およびその周辺をフィールドとした社会調査および、同時期に行われた高橋による同地域の寺院等を対象とした社会調査をもとに、伝統的宗教習俗——葬祭儀礼、契約講、代参講等——の現代的変容、及び、新旧宗教——「村寺」的曹洞宗寺院・立正佼成会・創価学会の地域におけるあり方について、実証主義社会学の方法論を念頭に置いた多角的調査の観点から明らかにすることを目的としている。

本テーマセッションに近い目的と性格を有する先行調査としては宗教社会学研究会による1979年からの地域社会における宗教に関する浜松調査がある。本研究はそれから四半世紀後の今日において、東北日本の大都市近郊をフィールドとし、同調査と同じ「伝統的なものと現代的なもの、新と旧との併存する多様性・複合性」（田丸徳善編『続都市社会の宗教』1-2頁）について分析を試みるものである。

浜松調査と性格を異にしている点としては、同調査のフィールドは「都市社会」であったが、今回の調査は主として「郊外——都市周辺地域」を中心としたものであることがある。その点においては、大都市（仙台）近郊郊外——都市周辺地域という性格のフィールドに関し、あらためて地域社会と宗教のあり方を問うという意図をも視野に入れている。

各発表の概略は以下の通りである。

・「伝統的近隣集団の機能変容をめぐって」（寺田）：契約講と呼ばれる地縁互助集団の機能変容について、契約講が結ばれる領域・様々な労働互助機能・成員資格・儀礼等の変容過程を、当

地における社会変動の問題系と絡めて議論を行う。

・「**宗教講の現在**」(平山)：宗教的講集団の近年における組織・活動・祈願内容などの変容と、それに寄与した社会変動や各種宗教職能者の介在といった内的・外的要因との関係について論じる。

・「**寺院行事にみる仏教寺院と新規入檀檀家との関係性**」(高橋)：対象地において開催されている寺院行事に注目する。特に近年新たに開催されるに至った寺院行事に焦点を据え、当該の行事を通して新規入檀檀家と檀那寺との関係の特徴について考察する。

・「**葬儀社を媒介とする村寺入檀の考察**」(瀧沢)：新檀家の急増が見られる都市郊外寺院の事例から、葬儀社経由でムラ寺へ入檀した檀家を取り上げ葬儀社の役割について考察する。特に葬儀社の寺院紹介、寺院側の葬儀受け入れ、檀家の寺決めの経緯や要因に焦点を当て分析する。

・「**立正佼成会の地域布教をめぐる諸問題**」(小島)：郊外地域における新宗教の布教活動が遭遇する葛藤について、また実際に布教活動を展開する「中間役職者」(主任)の活動内容の具体的な詳細について考察する。

・「**創価学会の郊外地域への展開**」(大西)：創価学会の運動過程を踏まえつつ、郊外地域への受容に関して考察を加え、そのパターンを析出したうえで、宗教様式並びに宗教意識の分析を行う。

セッションの進行予定は以下の通りである。

【午前】

1. 主旨説明
2. フィールド概要説明
[1部：伝統的村落内組織の変容]
3. 伝統的近隣集団の機能変容をめぐる(寺田)
4. 宗教講の現在(平山)
[2部：寺檀関係の現在]
5. 寺院行事にみる仏教寺院と新規入檀檀家との関係性(高橋)

【午後】

6. 葬儀社を媒介とする村寺入檀の考察(瀧沢)
[3部：郊外化と新宗教]
7. 立正佼成会の地域布教をめぐる諸問題(小島)
8. 創価学会の郊外地域への展開(大西)
9. コメンテーターから(孝本・土居・鈴木)
10. 全体討論(フロアを交えて)

「カルト」問題研究の展開と課題

趣旨：

櫻井は2004-6年の三年間をめどに「カルト問題研究」プロジェクトを「宗教と社会」学会において企画し、同時にプロジェクトのコアメンバーによって科学研究費「カルト問題と社会秩序：公共性の構築に関わる比較社会論的検討」を行ってきた。この度のテーマセッションにおいて研究の区切りをつけたいと考えている。

企画としては、櫻井がカルト問題研究の現状を総括的に展望した後、この分野で現在活躍されている研究者から3つの調査研究について報告をもらう。研究対象への研究者の関わり方(立ち位置の問題)、対象の分析(研究方法)、知見の公表と社会的効果(研究の社会的機能)に関して、いずれの発表も従来の調査研究の枠をこえようとしている。カルト問題の現場を長らく取材してきたコメンテーターから、宗教調査がリアルにこの問題を捉えきれているかどうか、また、宗教ジャーナリズムの域を超えた知見を提示しているかどうか率直な感想をもらおうと考えている。同時に、フロアから、宗教と社会の相克に関わる様々な論点を出してもらい、本プロジェクト、科学研究費研究に関して、批判的な評価を受けたいと考えている。

構成：

(司会)

1 櫻井義秀(北海道大学)：司会兼問題提起「カルト問題研究の現状と展望」英米圏のカルト問題研究と日本のカルト問題研究の比較検討を行いつつ、日本固有の問題点を提起する。

(発表)

2 中西尋子(龍谷大学)「現役信者の調査研究—統一教会女性信者の事例を中心に」韓国へ嫁いだ女性信者の聞き取り調査を軸に、いわゆる教団調査の諸問題を浮き彫りにする。

3 渡辺太(大阪大学)「社会を創り出す—引きこもり青年のセルフ・ヘルプ活動に関わって」カルト集団とは内閉化した(自家撞着に陥った)集団である。新たに社会との関係を再構築する契機がどこにあるのかを「引きこもり」という社会現象から捉え直し、なお、自身の支援活動を通して実践的考察をみる。

4 弓山達也(大正大学)「スピリチュアル文化に見られる自律性と抑圧—スピコンという場・参加者の事例から」スピナビ、スピコン等、スピリチュアリティを享受、共有する場に参加する現代人の志向と、仕掛けとしての現代社会の問題点を描出する。

(コメンテーター)

5 藤田庄市(フォト・ジャーナリスト)

「ジェンダーで学ぶ宗教学」の可能性

このテーマセッションは、田中・川橋の共同編集で世界思想社より平成18年度内に刊行予定の『ジェンダーで学ぶ宗教学』に派生し、その内容を発展させたものである。

ジェンダーの視点が宗教研究に導入されてから久しいといわれる。しかし、欧米に限らず日本でも、宗教研究は他分野に比べてジェンダー研究への抵抗が強いといわれている。また、宗教研究における「ジェンダー」の扱いは、主流の学問に付加されただけの特殊で限られた関心事であるかのようにみなされることが多い。その結果、女性による宗教とジェンダー研究が特殊化され囲い込みされている一方、男性によるジェンダーの視点を欠いた研究は批判の対象外におかれている現状がある。

今回は特に先鋭化された事象と問題意識に焦点をしばって、「ジェンダーで学ぶ宗教学」の可能性を探っていく。セクシュアリティ、ポストコロニアルフェミニズム、性的マイノリティ、さらに宗教運動の現場における当事者性と調査倫理など、従来この学会ではそれほど注目されていなかったが今後の宗教とジェンダー研究において重要な位置を占めるテーマを選んでいる。

- 1:30
| **イントロダクション** 川橋範子 (名古屋工業大学)
- 1:40
1:40
| **ポストコロニアリズムとフェミニスト神学** 黒木雅子 (京都学園大学)
- 2:05
2:10
| **宗教とセクシュアリティ** 田中雅一 (京都大学)
- 2:35
2:40
| **宗教とセクシュアルマイノリティ** 堀江有里 (花園大学)
- 3:-05
3:10
| **女人禁制をめぐる運動と解釈** 源淳子 (関西大学)
- 3:35
| **ブレーク**
- 3:40
| **コメント** 小松加代子 (湘南国際女子短期大学)
- 3:55
| **三土修平** (東京理科大学)
- 4:10
| **全体討議** (司会 川橋範子)
- 5:00

災害と救い

司会

コーディネーター 三木 英 (大阪国際大学)

発表者 (予定) 今井信雄 (関西学院大学)

同 井上利丸 (NHK 大阪)

同 杉本良男 (国立民族学博物館)

同 大岡頼光 (中京大学)

同 金子 毅

現代を生きる我々が念頭から消し去ろうとして消しえない言葉がある。「災害」である。

1995年、阪神淡路大震災によって多くの都市居住者が犠牲になって以来、災害は日本人の心に絶えることのない小波を起こすものとなった。次なる大地震発生の可能性が頻繁に、そしてリアルに報ぜられる昨今、「今度不幸に見舞われるのは自分かもしれない」との不安から逃れることができなくなっているのである。

大地震だけではない。大津波、台風、雪害と、大自然のもたらす脅威は明日にも我々を襲い、我々の生命を(理不尽にも)奪い取ってゆくか知れない。世界的な異常気象が指摘され、その原因が科学的に説明される限り、自身の住む地域を襲う天災などありはしないと一笑に付すことは、誰にもできはしないことであろう。

ことは自然災害に限らない。自動車、列車、航空機、船舶といった交通手段による事故もまた、いつ何時我々の身近で発生し我々を巻き込み、我々自身が犠牲者群に名を連ねることになることも、ありえないことではない。

突然の、大量の、そして理不尽な死は常に我々の傍らにある。こうした事態に宗教はどう対応することができるのであろうか。どのような「救い」が、どのようにして人々に与えられるのであろう(あるいは、与えることができているのであろうか)。こうした問題を考えてゆくことが当セッションの課題である。

当セッションの報告者として、阪神淡路大震災後に被災地に設置されたモニュメントを調査した今井信雄(関西学院大学)、ジャーナリストとして同大震災の記録に携わった井上利丸(NHK)、そして2003年末の大津波の被災地・スリランカで調査研究を行なった杉本良男(民族学博物館)、さらに船舶沈没によって大量の犠牲者を出したスウェーデンにおける事例に詳しい大岡頼光(中京大学)、また2005年に尼崎市で発生したJR西日本・列車脱線事故を調査した金子毅が予定されている。

「宗教と社会」学会第 14 回学術大会プログラム

制作: 「宗教と社会」学会 第 14 回学術大会本部

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

同志社大学神学部 関谷研究室 (関谷直人)

e-mail: nsekiya@mail.doshisha.ac.jp

電話 075(251)3344

編集: 関谷直人 (同志社大学神学部)

600 部印刷

2006 年 5 月 8 日